

桜蔭

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三十一回)

平成二十四年十二月十六日(日)

会場・桜蔭会館

5点 癌疑惑晴れたる朝や息白し 友子

4点③ 列島の劣化果てなし冬の星 守

3点 やつちや場のセーター・半袖多国籍 幸

覚えなき小箱の中味冬の夜 秀一

浮寝鳥またも約束忘れけり 秀一

2点① 障子貼る妻の不機嫌解せぬまま 守

トス上ぐるやうにミサイル冬空へ 明美

枯蝻螂斧振る気迫残りをり 友子

雪搔きの雪の落ちゆく水路かな 明美

ひとり居の大根一本厨に立つ ツル子

1点① 十二月眼をやる部屋の四隅かな 秀一

① 降誕祭海へと人の往きしまま 守

遠き富士あかねに消えし石露の花 ツル子

大切りのさといもうまし男鍋 ヤエ子

人住まぬ家の満天星紅葉かな ヤエ子

高速の下に冬日の倉庫街 明美

原発に頼ることなき世の寒さ 守

冬路上心ゆたかなギターの音 真三

ヘルスチェックの結果オーライ年暮るる 真三

ヤエ子

候補者のたすきへ寄りし冬の蜂 明美

明美

店共に人それぞれと冬に去る 真三

真三

鯛焼の羽根まで温き至福かな 秀一

秀一

枯枝揺れ静かな町の灯ゆれる ヤエ子

ヤエ子

当りくじ求める列や暮の町 ヤエ子

ヤエ子

※

冬掃除児童の声に応へりぬ

真三

救急車のサイレン近し月冴ゆる

友子

悉皆屋消へし辻なり風花す

明美

崩落の雪のトンネル声なき声 幸
結果待つ胸のざわめき虎落笛 友子
塩麴鍋流行りもの追ふ師走かな 秀一
急ぐ足ポインセチアの花舗過ごし ツル子
おばばの手筈の芋茎を転がして 幸

一茶忌や杖こぎ清し見守りぬ 真三
湯たんぼの湯で顔洗ふ日も遠き 友子
夜の更けし正体明かすすき間風 ツル子
目の葉師紅葉の寺の御霊杉 幸
花八ツ手見ぬか見えぬか光る星 ツル子
猪や耳に残りし咀嚼音 守
尊厳の芸術展にて
収容者の創意工夫や鎌鼬 幸
胃の検査終りて待ちて冬林檎 真三

(不在投句 古野明美、稲葉幸)